ごんぞ

2013年3月

後立山連峰

大町勤労者山の会

・・・目　次・・・

谷川岳の一の倉沢の闇に響いたヨーデル	桑原　巌	2
還暦の記念に青春時代の山に	鶴川　栄	3
今までにない沢山の山を経験した１年	石井ひろ子	4
大菩薩嶺・大菩薩峠	森田義彦	５～６
:根子岳山行記録	森田義彦	7
冬の白馬便り	鈴木　均	8~１１
単身生活終わりとなります	谷口伸二	１２～１５
安曇野の冬の魅力	井川恵右	１６
守屋山山行記録	森田義彦	１７
守屋山正月山行アルバム	森田義彦	１８

高尾山青春切符の旅山行　２０１３年１月１０日

谷川岳の一の倉沢の闇に響いたヨーデル　　桑原　巌

これは1956年、私が20歳の夏の日に起こしてしまった遭難事故の顛末紀である。

その日私は単独で谷川岳の一の倉沢4ルンゼの登攀を試みた。その頃の私の山登りは谷川岳周辺に集中していたが、一の倉沢は初めてであった。南稜テラスから4ルンゼ取り付きまでは難なくたどりついた。4ルンゼはＦ１からＦ４までの４つ滝が連続しているはずである。休むまもなくさっそくＦ１に取り付き登攀を開始した。靴底にトリコニーといわれる鋲の付いた登山靴を履いていたのでルンゼの中の濡れた岩壁の登攀は難渋を極めた。それでもＦ１、Ｆ２の２つ滝は何とか乗り越えてＦ３にたどりついた。Ｆ３の登攀はさらに厳しく濡れた岩に手を焼いた結果ついに鋲靴を脱いで素足で登ることにした。悪戦苦闘の末、ようやく滝の落ち口までたどり着き、そこにあった１本の潅木に手をかけて乗り越えようとした瞬間、潅木がずるっと抜け落ちて体が宙に飛んだ。「おーい、おーい」と、遠くから呼びかけるような声に呼びさまされて気が付いたのは滝壺の中だった。岩壁の上部に何人かの登山者の姿がありその人たちが声をかけてくれてたようだった。「大丈夫か、すぐにそこへ行くから動くな」という呼びかけがあって間もなく５,６人の登山者のグループが下りてきた。落ちた場所はＦ１の滝壺の中で、１５，６メートルは飛んだわけである。その登山者のグループは直ちに土合山の家に救助要請を出してくれた。救助隊が到着するまでの間に安全な場所への移動やザックの回収に手を尽くしてくれ、最後まで付き添ってくれた。そのグループが埼玉県の山岳会のメンバーであることを知ったのは山の家に帰ってからだった。

それから数時間待って救助隊が到着した時はもう夕刻だった。救助に来てくれたのは拓殖大学山岳部ＯＢ２名で暴が幕岩登攀の予定を中止して要請に応えてくれたものだった。２名の名前が番場さん、沢入さん、と知ったのも山の家に帰ってからだった。救助体制が整い。下降を開始したのは夕闇が辺りを包み始めた頃だった。

下降は６０キロの体重の私を背負って、暗闇の中の一の倉沢本谷の急峻な雪渓を下るという危険な作業である。雪渓の雪に茸状の突起を作り、それを支点にザイルを掛け替えながらアップザイレンで下る。この繰り返しが暗闇の中で数時間続くのである。暗闇の中でヘッドランプの明かりを頼りに下降が続いた。周囲の岩壁からは絶えず落石の音が響いてくる。そんな緊張の中で突然、私が背負われている人の口からヨーデルが飛び出したのである。歌声は高らかに暗闇の中に響き渡った。素晴らしい声だった。傷ついた体の私の胸に染み通る歌声だった。思わず胸の中に熱いものが溢れた。生涯忘れる事のできない思いである。　土合山の家にたどり着いたのは夜が白々と明け始めた頃だった。山の家の主人中島喜代志さんは知己の間柄であったが苦言めいたことは一言も口にせず、労りの言葉を掛けてくれた。最初に私を助けてくれたグループのこと、救助に駆けつけてくれた番場さん、沢入さんのことなどを知らせてくださった。そして一の倉沢の暗闇の中のヨーデルの主が番場さんであることも知ることができた。この番場さんが後に労山の全国連盟会長の要職に就かれた番場宏明さんで、後日富山県で開かれた全国登山祭典の際に再会する機会を得て、昔日のご厚恩に感謝の念を表せ、若き日の一の倉沢での感動を胸に甦らせることもできた。

この遭難事故は新聞記事となって実家の母の知るところとなり、もう２度と山には行くなという厳しい叱責を受けたが、山への憧憬の念絶ちがたく母の言葉に背いて７７歳の今日まで山登りが続いているわけである。

一の倉闇に響きしヨーデルの声遥かなり若き日の夢

還暦の記念に青春時代の思い出の山に　　鶴川　栄

1月~1日~2日
神奈川より丹沢山塊　塔の岳　津田広一　鶴川　栄　田島　彰
1/1　今年はわたしの６０歳の記念日として青春時代の丹沢へ思い切って出かけることにしました。
同行者を探してみたら２名がつきあってくれるというのでありがたかった。
元旦の昼過ぎにアルピコのバスにて松本をｓｙっぱつし新宿に夕方着きました。
携帯電話で屋井のばしょを危機到着して荷物を各自部屋へ置き、夜ご飯を食べに新宿の街へでました。久しぶりのネオン街を彷徨して晩飯の店の店を見つけて入りお酒を少々ごはんをたらふく食べて宿へ帰りました。津田さんと安宿の風呂に入り明朝の登山に備えて早く休みました。

1/2　宿を５時に出発して数奇屋にて朝飯を食べて５時３０分ごろ出発の電車にて一路登山口の渋沢駅へ。
約１時１５分にて渋沢駅へ到着後、駅前からバスにて大蔵登山口へ。
正月というのに大勢登山者だ！！
ゆずの黄色い実がたくさんついている木があっちにもこっちにもいっぱいだ。標高差１２００ｍちかくある大倉尾根はバカ尾根でたいそうつかれたが、４０年昔１年に１０回ちかく通った塔の岳へ友につきあってもらい感激の頂上を踏むことができました。帰りは、新宿駅から高速バス出発まで６分しか余裕がないので走ってバスにとびのり松本まで帰りました。自分の思い出の山に同行してくれた友人に感謝します。ありがとう。

黒腑山山行　鶴川栄

２月１７日（日）　松川村６：００出発　車坂峠朝間２０００スキー場　８：００登山開始。
黒斑山（浅間山外輪山）　鶴川栄　英子　緒方昌昭　津田広一　その他３名

高嶺高原ホテル前から登山を開始しました。ちかごろ「山と渓谷」等で雪山コースとして黒斑山が紹介されてから沢山の登山者が来るようになりました。わたしの写真が全日本山岳写真協会主催の公募に入選した年（１９９８年）あたりはポチポチと上る人がいたくらいでした。でも現在は行列をなして大勢の登山者が訪れていました。かなりのグループが雪山ツアーの隊りで稜線に出たると浅間パノラマ劇場の始まり！！
皆どっと歓声を上げました。かなり（２０人ぐらいのパーティーが５グループぐらい）の人数が入っていたので頂上で記念写真をとりトーミの頭まで下り昼飯をとりゆっくりと高嶺の峠まで下山し、帰りはかけ湯温泉につかり帰りました。わたし達は安全につとめる山楽会として行動しています。

今までにないたくさんの山を経験した一年　　石井ひろ子

真っ白な雪に覆われていた家のまわりの雪も消えようやくじめんが見えてきた。キムチ鍋を囲んだ土曜例会・新年会又忘年会の楽しかったこと仲間っていいなあと思ったひとときでした。昨年は春の霧訪山にはじまり夏の合宿で訪れた船窪岳、烏帽子岳、秋には焼岳、権現岳等々今までに無い程たくさんの山を経験することが出来たこと、サポートしてくれた皆様に感謝です。

この２ヶ月（1/5の守屋山以後）なにをしていたかといえば寒さとの格闘ではなく、少しはコタツの晩もしていたが今年はひさしぶりの雪かきという仕事を何回もしたことです。今年１月５日のもりやさんでは皆様に大変ごめいわくをかけてしまい申し訳ありませんでした会員外含め１３名参加という最良のお天気の中、さんちょうから全山眺め満足して下山を始めた途中、ヒザがガクっときてミシっときた。前に歩けず横向きで何とか下山することができた。荷物を背負ってもらったり、ずっと付き添ってくれた皆様ありがとうございました。病院の検査では異常なしということですが日頃トレーニングなど改めて必要と反省しております。
まだ下りに少し自信がなく少しずつ回りの山などで訓練してから又ご一緒させてもらえたらと思っております。何といってもお昼とおいしいコーヒーを山の上で飲む味がわすれられないから。それと被災地支援で自分に出来ることがあったら支援のたびでも山行でも参加できたらと思っておりますので今年もよろしくお願いします。Ｈ２５、３月１０日　石井ひろ子

大菩薩嶺・大菩薩峠　　森田義彦

山のメンバー5名+2名のパーティーで大菩薩嶺～峠を周回する。

当初の計画では上日川峠まで歩いてそこから唐松尾根コースを大菩薩嶺まで登り、大菩薩峠に下って上日川峠に戻るつもりだったが、上日川峠までの行程を片道にできると言うメリットから、直前のヤマレコ諸氏の記録を見て丸川峠経由の大外廻りコースに変更した。

丸川峠分岐 P8：00 の出発に合わせ大町を 4：30 に出る。小淵沢付近では好天で八ヶ岳方面や甲斐駒・鳳凰三山の景観は素晴らしかったが、南東側は山際が霞がかかったように白っぽくて富士山は背景に埋もれて見栄えしない。

ほぼ予定通りに丸川峠分岐 P に着くと駐車場はすでに満杯。わずかなスペースに苦労して停めている間にも入って来る車があった。

コースを変更した場合の行程表を配って参加者に諮り、全員一致の支持を得て丸川峠に向かう。
北東に向けての道だが前半は日当たりがよく無風ですぐに暑くなり半そでになる。太郎山以来，1ヶ月のブランクでやや急な登りがきつい。

30 分ほど登ると踏み跡が凍った雪道となり、1450m 付近からツルツルに凍った所が現れるも、2 度の休憩をはさんで 9：45 に何とか丸川荘に着く。

途中で出会った男女連れは丸川荘に泊まったと言い、追いかけるように小屋主らしい長靴の人が下って行ったが、登りは自分達だけで他の登山者はすべて上日川峠をめざした模様。静かでいい。

小屋の周辺は風が冷たく上着を着て一服し 20 分休んで大菩薩嶺に向かう。すぐに樹林帯となるが、道がツルツルに凍っているのでここで 4 人がアイゼン装着。

その辺りから尾根の北側の殆ど日の当たらない道になり、雪が安定して歩きやすいのでそのままノンアイゼンで先行し、小さな尾根まで行って後続を待つ。その間に何名かの下山者があり、また下から 2 人の登山者が追い越して行ったが、1 人は何と夏用のゴム長だけなのに驚く。尤も我がパーティーにも長靴が 1 名いるが夏用ではない。

そこから先も全体としては尾根の北側を辿るコメツガ等針葉樹の森なのだが凍った部分はあり、難渋させられる。最後は大きく北に廻り、ジグザグを 2 度繰り返して大菩薩嶺に至る（11：38 着）。

大菩薩嶺は展望のない林の中の空間なので 10 分歩いて見晴らしのいい雷岩に移動し昼食をとる。風が冷たいので昼食はそそくさとすませ大菩薩峠に向かう。

大菩薩峠へ下る道は、陽当たりはいいが凍った所と泥んこの所がめまぐるしく変化するので要注意。まだアイゼンを外すべきではない。

のびやかな景観の中をルンルン気分で下ったが、西～南側には霞を濃くし下の上日川ダム湖を隔て広がる富士や大パノラマを見てもらえなかったのが残念でならない。避難小屋の先の小高い丘からふり返るなだらかな草原状の景観もなかなかのものだ。そこから介山荘を見下ろしながら　一気　に下って大菩薩峠着 15：03

大菩薩峠からは暖かい陽射しを浴びながらの快適な道で、休憩所のベンチに座りこめば一眠りしたくらいの昼下がり時。こちらを下りにしてよかった～の声しきりだった。

13：46 富士見山荘着。長いコースなので 15 分休んで福ちゃん荘へ。相変わらずの凍結状態なので県道を歩いて上日川峠・ロッジ長兵衛へ。もう一度休んで最後の下りにかかる。

この道も狭い道幅全部が凍っている部分が多く、アイゼンをつけたまま下る。途中で崩落のため一旦県道に出て再び登山道に戻るが、その下も凍結の連続で最後まで気が抜けない。

第 2 展望台，第 1 展望台で休みながら 1 時間 20 分で下り、15：55 駐車場着。見込み通り 8 時間弱の行程だった。

丸川峠～大菩薩嶺を登りとしたのが正解で、長老と長靴おじさん(尾形さん)，森田もノンアイゼンでは無理だったに違いない。(転倒 3 回)

総時間 7 時間 55 分　歩行時間；6 時間 20 分

根子岳山行記録　１１月１８日 参加者 鈴木、勝野、横田、緒方、石井ひ 森田、小松原利　　森田義彦

タイム

7：40 登山口 P8：07 - 8：10 登山届ポスト投函-8：38 東屋 8：42-8：58 第 1 標識(1.1km←／→1.5km)-9：15 第 2 標識(1・8km←／→0.8km)9：20-10：01 第 3 標識(2.1km←／→0.5km)-10：39 根子岳山頂・昼食休憩 12：02-12：10 第 3 標識-12：49 東屋-13：13 登山口ポスト-13：18 登山口 P

コースの状況

積雪;登山口付近は 5cm 程度。山頂周辺は 35～40cm。

コース上に危険個所や問題点はない。

行動の記録

根子岳・四阿(あずまや)山縦走をめざした大町労山 11 月の会山行は、予想を越える雪でシーズン早々から雪山を堪能したが、山頂周辺はガスに包まれて展望なく。天候の回復も望めないので縦走をやめて早々の下山となる。

大町市美麻の道の駅ポカポカランドを 6：20 発。菅平牧場登山口着 7：40。前夜の雨は上がり、午後からは晴れると予報。青空も見えるが、山頂方向は厚い雲の中で雨が落ちないだけましと言う感じ。風が冷たくｊかなり寒い。

登山口は 5～10cm の積雪。すぐにダケカンバの林となり風が停まると直に暑くなりオーバーヤッケを脱ぐ。

30 分弱で東屋(1757m)に着き、ここで雪山初体験と言う新人さんを交えて簡単な自己紹介。

東屋から 15 分あまりで最初の標識を通過。登山口から 1.1km,根子岳へ 1.5km となっていた。傾斜が緩やかとは言え、そんなに歩いたかなぁと言う感じ・・。

さらに 15 分で 2 つ目の標識に至る。ここには登山口から 1.8km，山頂へ 0.8km となっていて『えッ！　もうそんなに・・』と思ったが、そこから 40 分もかかって着いた 3 つ目の標識では山頂まで残り 500m となっていて『えぇッ　そんなぁ・・』となった。たしかに雪が深くなり、勾配もきつくはなったが、40 分で 300m は解せない。多分 2 つ目の標識がおかしいのだろうと言うのがみんなの見解だったが、難渋気味だったこともたしかだ。　残り 500m を切ってちょっと長いなぁと思い始めた頃、ようやく祠と鐘のある山頂に着く。

勝野さんがツェルトを広げ、『これを 8 人が被って端を押さえればツェルトの中で丸くなって風を避けながら飯が食える～』と何回も試みたがうまく行かず、山頂から少し下がった風の少ない場所を選んで昼食となる。

一時は予報通り空が明るくなってきたかに見えたが、それも束の間で時に小雪も舞う天候は変わらず、好転の見込みが立たないので縦走はまたの機会にと言うことになり下山する。

雪山初体験の麗華さんは鍬ノ峰の募集山行に参加した人で、予想以上の積雪の斜面でのラッセルや展望のない山頂での寒い食事等，雪山の厳しさを体験する一方で、モンスターになりかけたオオシラビソや雪に耐えるダケカンバの樹皮，枝に張り付いた樹氷の美しさに感嘆の声をあげる等，楽しさを充分に味わってもらえた。

自分は手袋を忘れて仲間から借りた。スパッツも忘れた。装備も心構えも不充分なまま，と言うか冬山とは思っていなかったのでちょっと焦ったが、山は真冬並だった。

大町では一度うっすらと積もっただけで、日常生活ではタイヤもまだ変えていないし、畑の仕事は山ほどあって気持ちがまだ切り替わっていなかったのがこれで目が覚めた。

早々に装備を点検しなくてはッ！

冬の白馬だより　　鈴木　均

１１月に入って寒い日が多くなり、１４日は大雪になった。
一晩で約30センチ積もり、白馬三山は一気に雪化粧した。

ノーマルタイヤで恐る恐る出勤した。後で聞いた話では、佐野坂では早速スリップ事故があったという。スタッドレスタイヤに交換するのは、勤労感謝の日の前頃でいいだろうと思っていたから、天に「甘いよ！」と言われたようなものだ。その日、急いで自動車屋さんに行って交換作業してもらった。４本で２１００円なり。今後、もっと降るかもしれないと思い、預かってもらっていた中古の除雪機も家まで運んでもらった。除雪機用のガソリンも購入し、いつでもスタンバイOKにした。早く動かしてみたいのだが、１４日の雪も根雪にならずに、その多くはいったん溶けてしまい、まだ出動するほどの積雪はない。それでも、その後も雪が降る日が増え、長靴生活が始まった。五竜や八方のスキー場は、早々と２３日から一部のゲレンデをオープンした。

１１月末になって、気象庁は、この冬の長期予報で寒くなると修正した。たまたまラジオのスイッチを入れたら、今年はカメムシが大量に発生していると伝え、科学的根拠は不明だが、そんな年は大雪になるという言い伝えがあるらしい。白馬の冬生活は今年で２年目だから、まだまだよくわからないが、なんとなく昨年より初雪の降る日が早いし、降雪量も多い気がする。その上、気温が低い！今年の紅葉がいつもより綺麗だったのも関係があるのだろうか。テレビの天気予報では、１１月中下旬から「１２月並み」とか「真冬並み」、１２月になると「1月並み」という解説が多くなった。

師走初日も、明け方からずっと雪が降り続いた。窓の外の温度計は、氷点下を指していた。

大町労山の忘年会は、例年、信濃大町駅前の店で行われる。白馬駅まで雪道を歩くと１時間以上かかるので、自転車で行った。駅までは緩やかな下り坂なので、滑って転倒すればたいへんなことになる。幸い、雪のない路面が多く余裕を持って駅に着いた。数年ぶりに大糸線に乗ったが、土曜日のせいか、２両の電車には、乗客は１０名いるかいないかだった。会員１３名が集い、山の歌で宴は盛り上がった。大町駅発２２時前の終電車で白馬に帰った。まだ、本格的なスキーシーズンに入っていないので、雪国の夜道は暗く、なんとなくもの寂しい。

１１月もよく登った。白馬乗鞍・八ケ岳中山尾根（ﾊﾞﾘｴｰｼｮﾝ）・編笠と権現岳・上田の根子岳・中アの越百山。紅葉あり、雪ありの晩秋から初冬の山、すべてが心に残る山だった。

いつ、初滑りに行くか。去年は、白馬村内共通シーズン券を買ったが、使いこなすほど滑らなかったので、今年は購入をやめた。白馬村以外の比較的近いゲレンデにも行ってみようと思う。

12.2 記

ほんとうに「雪は天からの贈り物」かと思うことがある。「白銀の世界」というが、それは都会人の発想だ。確かに新雪はさらさらで、太陽に照らされればきらきら輝いて、それはそれは何ともいえない美の世界である。

しかし、雪が降る日は空はいわゆる鉛色で、午後３時以降になると、周囲はモノトーンの世界になって、決して明るい気持ちにはなりにくい。だいたい、除雪という作業は、その関係の仕事に携わっている人以外は、全く生産的ではない。ただ、生活する上で除雪しなければならないから除雪しているのだ。そのためにどれだけの時間と費用を要しているか。大雪の日のあとは、もうこれ以上降ってほしくないと思うこともしばしばだ。

それにしても、この冬は大雪と寒さが厳しい。１１月からこうだったから、年を越せばどうなるのかとも思う。

１２月９日（日）天狗岳に行く日は、前日の大雪で道路には30センチ以上の新雪が積もっていた。３時半に起きて４時半に家を出る予定で前夜全てを準備しておき、その通り行動した。起きたら、周りはまさに雪の海。庭も道路も空き地も境界がない。車の除雪もたいへんだが、家の前の道路がまだ除雪されていないため、メイン道路まで車が出られない。新雪なので重くはないが、なにせ５０ｍほどの長さを車が脱出できるようにしなければならない。近くでラッセル車の音がしたので、急いで追いかけた。ところが、想像以上にラッセル車はスピードを出して除雪し、どんどん前進していく。あまり近づくと巻き込まれれて危険だ。うしろから手を挙げて合図したが気がついてくれない。結局２００ｍ以上追いかけたが、そんなまだ暗い明け方に人が歩いているとは、ラッセル車のドライバーは思わないのだろう。

家に戻って、ダンプ（家庭用の一番大きな除雪するシャベルのような道具）で前の道を車が通れる程度、自力で除雪した。今日は脱出できないとほぼあきらめていたが、予定より１時間ほど遅れてなんとかメイン道路まで出ることができ、松川村の道の駅で仲間と合流することができた。

その後も雪の日が続き、栄村や野沢温泉村・飯山市には大雪警報が出て、大糸線は運休。白馬高校は休校になった（ちなみに、小中学校は大雪警報が出ても休校にはならない）。菅平はマイナス20度以下にもなった。家の物置は、一日中マイナスで、野菜は和室へ移動させ、ビールは冷えすぎるので、ストーブの前にしばらく置いてから飲む（去年はしゃりしゃりのシャーベット状に凍っていたこともあった）。最高気温が氷点下以下という真冬日の連続だった。

仙丈ヶ岳で遭難があった。越後駒ヶ岳でも登山者が下山が大幅に遅れたとの報道があった。

物置の上の屋根雪は、普段は10数センチも積もれば、自動的に落下するのだが、この冷え込みでなかなか落ちず、７０センチ近く積もったままになっていた。久しぶりに青空が出た翌日一気に雪崩れた。この下に人がおれば、まさに雪崩の下になって埋もれてしまう。目撃者がいなければ、あの世行きだ。

中古の除雪機を購入した。エンジンがかからない、回転が止まった、地面に潜って上がってこないなど、「トラブル」が続き、慣れるまで１週間を要した。（実際はトラブルではなく、操作上の問題だけだった）四苦八苦しながら、いまではほぼ問題なく操作できるようになったが、こういう機械は徹底したアナログの世界だ。エンジンチェンソーもほぼ使い慣れ、業者に依頼していた刃研ぎもおおよそ自分でできるようになったし、向かいの家から借りた重機（ミニユンボ）の操作などもやって、今年は機械いじりも結構やった年になった。中古の軽トラックもほしいなと思っているが、AT車は高くて手が出ない。MT車は１０万円ほど安いが、免許がないため４万円ほどの費用を出して大町の教習所へ二日間の講習に行かなければならない。

クリスマス前の越百山の帰りには、白馬村に入って佐野坂でスリップし、雪に突っ込んでしまった。急坂の下りカーブで毎年何件か事故がある場所というのはわかっていたのだが、自分もやってしまった。路面が凍結しているのに、うしろからトラックがくっつき、ややスピードが出ていて、カーブでエンジンブレーキせずにブレーキペダルを踏んだことがきっかけになったようだ。ＪＡＦを呼んでなんとか脱出することができたが、バンパーにひびが少し入ってしまった。翌日、白馬村はマイナス16度を記録した。（この日は、全国的に冷えた）

ことほどさように、この冬はまだ１２月が終わっただけなのにたいへんだ。今日は大晦日。年内に積雪がこんなにあるのは珍しいのではないだろうか。　　12/31記

今年の正月は白馬で迎えた。といっても、生活に特別の変化はなく、妻がクリスマス前から１月上旬まで長く居たので、食事を自分で作らなくてよいから楽だったことと、正月２日から山に行けたことだろうか。妻は白馬に来ても、スキーをやるわけでもなく、もちろん山に行くわけでもない。季節にかかわりなく温泉と蕎麦三昧の毎日である。

1/7　好天に恵まれ八方池の上まで上がったが、そこからは強風だ

その後の報道によると、雪が１１月の早くから降ったこともあって、年末年始の県内のスキー客は昨年実績を上回ったという。白馬では、一昨年の原発事故から外国人があっという間にいなくなったが、いまやエコーランドの通りを歩いているのは外国人だけというくらい外国人が増え、トラブルもいくつか起こっているようだ。外国人もホテルやスキー場にとってはお客様には違いないが、平日のゲレンデは、実にがらがらで、はたして日本人のお客様は、どの程度増えたのだろうか。

１月２日の悪天は、各地で山の遭難を起こした。天気予報はよくなかったので、ある程度は予想していた。「所詮は北八ツ」という軽い思いから、大町労山のＭさんと二人で、縞枯山から北横岳周辺を目指したが、稜線は強風がきつくてトレースも消え、安全を考え北横直前で撤退した。坪庭からならダイレクトに行けるが、それでは面白くないので、人が入っていないマイナールートを取ったのがよくなかった。しかも、スノーシューで登ったために、急斜面では滑りやすく、Ｍさんのようにワカンの方が、やはり山には向いていることがわかった。

1/22 やなばスキー場の上、権現山からの青木湖と後立山連峰

それでも、２月初めにスノーシューでの案内を知人を通じて依頼されたので、白馬周辺でスノーシューで行けそうなコースを研究した。２万５千分の１の地形図を調べてみると、等高線の幅が広くて起伏の少ないスノーシューの適地がいくらでもあることがわかった（その中のいくつかは、ガイドによるツアーも設定されている）。街中の道路は除雪されている以外は、山はもちろん大町市以北は平地でも、いらないほど雪が積もっているから、スノーシューかワカンさえあればどこでも行けるのだ。いままでスノーシューは持っていても、スノ

1/19 みねかたスキー場の上で見つけた熊棚

ーハイク的なことは白馬でもやっていなかったので機会としてはよかった。依頼されたグループは東京の女性達、しかも皆３０歳代で、山の上でチーズフォンジュをつくるという、まさに「山ガール」たち。およそ山屋の感覚ではなく、それはそれで楽しみにしていたが、結果的には天気予報が悪いので中止したいとのことで 実現できなかった。

野麦峠「お助け小屋」前で

先日ＮＨＫの「首都圏○○」とかいうから関西などでは見ることができなかったと思うが、「北八ツ・青木湖畔での"メルヘンキャンプ"・西穂独標」の３パターンで冬山にガイドがタレントを連れて行くという番組があった。「ああ、これはまさに、未組織登山者を冬山に誘う恰好の番組だなあ」と感じるＮＨＫらしい映像だった。テレビもデジタル化されたので「行ってみたい」などの視聴者からのメールやツイッター等が、リアルタイムで画面下に流される。冬の湖畔での"メルヘンキャンプ"などという発想はこれまでにはなかったから、今後はこんな「山ガール」達も増えるかもしれない。東京から来る予定だった女性達も、山の上でチーズフォンジュという発想だったから、そう思えてならない。だいたい、最初に相談があったのは、五竜スキー場の上の「小遠見へスノーシューで行きたい」（しかも、スノーシューを履いたことがない人が二人いる）というから、「２月初めの小遠見は冬山ですよ、よほどの好天でない限り、寒くて、のんびりチーズフォンジュなどやるどころではありません」とアドバイスしたら、それならコースはお任せということで、「みねかたスキー場」という高度の低いゲレンデ上部で歩くスキーコースもあり、天気がよければ白馬三山などの後立山連峰が間近に見えるロケーション最高の所へ行く予定にした。女性達の男友達はグループで唐松岳に登る予定だったが、天気予報を見て断念したためにスノーシューも中止になったのだが、２月初めの唐松は甘くないですよと忠告していたことが、どう影響したかわからない。今後は、このような山をめざす若い青年男女が増えていくのだろうか。

１月も毎週山やスキーに出かけたが、青春 18 切符を使っての東京・高尾山(1/10)も面白い企画だったし、諏訪湖の南にある守屋山(1/5)は天気にも恵まれて南北中央アルプスなど大パノラマだった。車止めから深雪をラッセルして３時間半かかった野麦峠(1/28)は、以前車で来たことはあったが、「ああ、飛騨が見える」と冬の峠を越えた明治の女工たちのふるさとへの思いを少しは感じたような気もする。

1月 28 日、「たまねぎ村」と家の前

ところで、この冬は全国的な傾向のようだが、白馬でも気温が低く、雪も多い。ただ、稜線は山肌が少し見えるので例年並みかそれ以下の感じがしないでもない。去年まで意識していなかったが、白馬岳と小蓮華山の稜線直下の山肌には白馬の雪形がはっきりとわかるくらいだ。例年なら、雪が降らなくても、ほとんど一日中曇天という日が多かった気がするが、この冬はときどき高気圧に覆われ、それこそ絶好のスキー日和、山日和に恵まれる日もある。そんな日、白馬三山や五竜岳など後立山の山々を眺めると、「うーーん、最高だ」というくらいにしか言葉にならない、不思議な、文字にできない格別な思いになる。

(2013、2,2 記)

単身生活は終わりとなります　　谷口　伸二

２０１１年４月から始まった気楽な単身生活ももう終わろうとしています。あずみ野からは日帰りだとチョット行程的にきつい越後の山々にこれからは何時でも登れそうと職場が変わる不安より遠足に行く前夜のようなワクワクした気持ちで引っ越したのにモー終わりですか？と感じる今日この頃です。この間に登った越後の山と写真です。

①　２０１１．５．２１　谷川岳

メンバー：谷口、他３名

コース：ロープウエイで天神平→山頂をピストン

石川から義弟（年上ですが）とその仲間で行きました。天神平までは一般の方が多く混み合いましたがその先は心地よい山行でした。

天神平から谷川岳

残雪の中を歩く

山頂にて

②　２０１１．７．１０　平標山

メンバー：谷口単独

コース：元橋登山口→山頂→山の家→元橋登山口

谷川連峰縦走の下見的な計画で行きました。登山口からしばらくは急登で階段もありますが危険な所はありません。日帰りで温泉には良いところです。

森林限界から山頂方向

山の家への長い階段

ハクサンチドリ

③　２０１１．９．７～９　越後駒ケ岳・中ノ岳

メンバー：谷口単独

コース：駒の湯→越後駒ケ岳→中ノ岳をピストン

まず越後三山を踏破しようと駒ケ岳と中ノ岳に登りました。７月の新潟・福島豪雨のため、枝折峠まで道路が開通していなかったので少し遠くなりましたが駒の湯から登りました。９日の朝まで１人っきりで誰にも会わず自由というか孤独というか静かでした。

駒ノ小屋

駒ノ小屋からご来光

駒ケ岳山頂にて

④　２０１１．１０．２９　大源太山

メンバー：谷口単独

コース：湯沢大源太キャニオン→山頂をピストン

日帰りで何処に行こうかとインターネットを見ていると上越のマッターホルンという大源太山が近くにあることが分かり早速行ってきました。最初から急登って感じの山でしたが若い女性（関東からの山ガール）も多くにぎやかでした。ここは新幹線とﾀｸｼｰを乗り継げば東京からでもゆっくり温泉にも入れる近い山のようです。

登山口からの大源太山

中腹からの大源太山

山頂のにぎわい

２０１２．６．１０　守門岳

メンバー：谷口単独

コース：二口登山口→守門岳→大岳→保久礼小屋→登山口

豪雪地で春の雪庇がすごい所とインターネットに出ていたので５月５日に一度来たのですが積雪期の道が分からず近くの峰でおにぎりを食べ帰ってからのリベンジでした。すっかり雪も融けてなくなり山頂に少し残っている程度でした。一日中雨でしたが、きれいなブナ林が印象的でした。

ブナ林の中の道

山頂近くの残雪

雨の山頂

もやしのように出ているブナの芽

⑤　２０１２．６．２４　荒沢岳

メンバー：谷口単独

コース：銀山平→山頂をピストン

越後駒ケ岳と中ノ岳を歩いた時に見たすぐ近くにある形の良い山を調べたら荒沢岳でした。行ってみるとクサリや梯子の連続するところもありましたが花も咲いており展望も良い山でした。

山頂にて

ヒメサユリ

ムシトリスミレ

⑥　２０１２．９．２２　武能岳

メンバー：谷口他４名

コース：湯沢町土樽→蓬峠→武能岳山頂をピストン

職場の仲間から武能岳に行きませんかと声をかけられる。ちょうど谷川連峰を縦走しようと考えていたところなので下見もかねて同行した。ブナ林からクマザサで覆われた展望の良い稜線へ。ときどき霧の出る天気でしたが気持ちの良い稜線歩きでした。

クマザサの稜線

蓬峠と蓬ヒュッ

山頂にて

⑦　２０１２．１０．６～８　谷川連峰縦走

メンバー：谷口、森田

コース：元橋登山口→平標山→仙ノ倉山→万太郎山→大障子避難小屋(泊)

大障子避難小屋→谷川岳一ノ倉岳→茂倉岳→茂倉岳避難小屋(泊)

茂倉岳避難小屋→武能岳→七ツ小屋山→朝日岳→笠ヶ岳→白毛門→土合

津南へ来た時から歩きたかった谷川連峰。森田さんと一緒にいきました。インターネットの動画で見たときは展望の良い稜線をルンルンで行けると思っていましたが、一つ一つの山を越えていくアップダウンの多い稜線でした。２日目は雨と風で予定より早めの避難小屋泊まりとなりましたが、おかげで翌朝はきれいなブロッケンを見ることができました。紅葉もちょうどいい感じでｇｏｏｄな山行でした。

アップダウンが多い稜線

エビス大黒から万太郎

谷川岳の山頂は大混雑

茂倉岳でのブロッケン

朝日岳山頂付近の草原

土合駅　地下ホームへの長い階段

⑧　２０１２．１０．２０　鳥甲山

メンバー：谷口他３名

コース：むじな平→山頂→屋敷

担当工事現場から良く見える鳥甲山へ、何時でも行けると思っていましたが最後になってしまいました。昨年からそのうちにと言ってきた県連女性委員会の仲間と行きました。少し岩場もありましたが特に問題なく登れました。山頂は展望がなく紅葉が無かったらイマイチ？今回は天気も良く紅葉もきれいでよかったです。

登山口付近の紅葉

クサリ場

山頂

以上　津南町での単身生活２年の間に登った近くの山です。北アルプスのように３，０００m級の山はありませんが、それなりに楽しめる山が多くあります。登り残した八海山、平ケ岳、丹後山、武尊山や尾瀬とその周辺の山など、あと１年必要でした。今後、松川村から一泊プラスで登ろうと思います。その時はいっしょにお願いします。

安曇野の冬の魅力　井川恵右

安曇野の冬は長く、かつ厳しい。雪と氷と、吹きすさぶ寒風に閉ざされる冬の辛さは、実際にこの地に住むものでなければわからない。だからこそ、草や樹や花や生物のすべてがいっせいに、芽吹き、活動を始める春の感動が安曇野の人々の生きる原動力になってきたと言っても過言ではない。自然も又、人間と同じように自らが成長するために、そしてさらに美しくなるために、試練が必要なのかもしれない。春と夏の短い美しさのために、長い長い冬をじっと耐え抜く。そんな逞しい底力を秘めているところに安曇野の美しさを解く鍵があるといえる。安曇野の自然のふところで、と言ってもそれは過去のことであり、今では安曇野の自然や、原風景は限られた場所になってきているが、都会の人々はそれを求めて安曇野に訪れる。かつて、人間教育に徹した研成義塾の井口喜源治（ＪＲ穂高駅前に記念館がある）そして、日本の近代彫刻を確立しながらも、短い一生を閉じた夭折の彫刻家萩原碌山をはじめとして、日本の近代を支えた多くの逸材を輩出したのも安曇野の厳しく、美しい風土と無縁ではないと思われる。この秋、燕岳に登山し燕山荘に泊まり二代目小屋主の赤沼健至の話を聞いた。氏は本当の美しさを知りたい人は「ぜひ冬の燕岳に来ましょう」といい、冬の厳しさがあって春、夏の山の美しさがあるという話が印象に残った。安曇野には常念校長といわれた有名な校長がいて、月曜ごとにあった全校朝礼の訓話で「常念岳を見ろ」からはじめて「今朝は雪をかぶっているが、ちっとも寒がっていない。お前達もがんばれ」と山にかこつけて訓話をした話が美談として伝えられている。今安曇野のシンボルとも言える常念岳は厳しい冬を象徴するように、雪煙を巻き上げながら冬の青空をバックに私たちを見下ろしている。

屋敷林の残る安曇野の冬景色

守屋山山行記録　２０１３年１月５日　　森田義彦

参加者　桑原、鈴木、勝野、小山、井川、石井ひ、石井良、鶴川栄森田、平林、谷口、その他２名

コースタイム

8：50 立石登山口 9：16 - 9：42 立石(岩の名)-9：46 岩巡りコース分岐・十文字岩・平成のビーナス 9：48-9：55 鬼ヶ城(大岩)-10：13 浅間の滝(氷瀑)10：15-10：38 休み処-10：54 東峰 11：01-11：20 西峰・ラビット小屋(昼食)11：59-12：15 東峰 12：29-12：57 ビーナス-13：14 登山口-13：18 駐車場

コース状況／その他周辺情報

登山路は概ね良好。ただし無数の枝道があり、下山時迷うおそれ無しとしない。
積雪あり。凍結して滑りやすいのでアイゼンがある方がよい。

行動の記録

大町労山１月の月例山行は伊那市の守屋山。

－15℃と今季一番の冷え込みの中，参加者 12 名(＋1 名)は松川村道の駅『松川』に 7：00 集合し、3 台に分乗して伊那市の立石登山口に向かう。8：50 着。

9：07 出発。薄い雪に覆われた登山道は凍結しており、滑らないよう慎重に登る。　空気の冷たさは一級だが雲 1 つない快晴で、南斜面の立石コースは樹間から陽光がふりそそぐ陽だまりの道なので寒さを感じないどころか、じきに暑くなってヤッケを脱ぐほど。

滑りやすいことを除けば歩きやすい道で、途中に岩巡りのコースがあり、立石(僧侶が立つ姿を思わせる)，夫婦岩，十文字岩，鬼ヶ城等の奇岩、巨岩や『平成のビーナス』と銘打った木等が次々と現れ、また 50 分あまり登った所では『浅間の滝』と言う氷瀑も見られ飽きさせない。

浅間の滝から 20 分あまりで『休み処』と言う広場があり、そこは前岳(1514m)と言う小ピークとの鞍部で、そこから疎林の斜面をジグザグに登ること 20 分弱で守屋山東峰に着く。

東峰は 360 度，遮るもののない大展望台で、まず最初に甲斐駒ヶ岳・北岳・仙丈ヶ岳等南アの山々が目に飛び込んでくる。

南アから目を北に転じて、八ヶ岳，霧ヶ峰，美ヶ原，鉢伏山，高ボッチ，後立山連峰，常念山脈，槍・穂高岳，乗鞍岳，中ア・木曽駒ケ岳，伊那前岳，空木岳・・，とひと廻りした後、東峰よりも高い西峰に向かう。20 分で西峰着。

展望は東峰にやや劣るが、西峰にはラビット小屋と言う小さな小屋があり、ここで寒さや風を避けて休むことが出来る。

小屋の中は－8℃で半袖でいられる気温ではなく、ヤッケを着て昼食。次々と登って来る登山者に小屋を譲るべく早々に食事を済ませて東峰に戻り、陽当たりのいい岩陰で待っている仲間達と合流。

レンズを 250mm に替えてもう一度主だった山々を撮り、12：29 から下山。40 分で駆け降りる。

悪天候の北八ツ(1 月 2 日)から一転してこれ以上ない晴天に恵まれた守屋山からは、何も見えない中を登った縞枯山，三ツ岳Ⅰ峰，Ⅱ峰や登れなかった北横岳が悔しいほどよく見え、再チャレンジへ意欲をかき立てられた。

守屋山正月山行アルバム

２０１３年１月５日